

【小説】空の感触

木内 真美子

手を伸ばせば、空に触れられそうな気がする。ベランダに立っているからだろうか。空が目と鼻の先にあるような気がする。

洗濯物は、冬の空気を吸って冷たくなっている。まだ乾ききっていないものもあって、洗濯ばさみから服やタオルを外すたびに手のひらや指にしみる。冬は洗濯物を取りこむのがつらい、と言っている母さんの気持ちがよく分かる。

大学から帰ってくると、居間の机に紙が一枚置いてあった。母さんの字で、洗濯物をよろしく、と書かれていた。今日は母さんがパートに行く日だったのをすっかり忘れていた。一時間かけて帰ってきて、いきなり家事を頼まれるのは気が進まなかったけれど、仕事に行っている父さんや部活動で忙しい妹にはできないのだからしかたがない。

上着を羽織らないでベランダに出たのは失敗だった。洗濯物を取りこむのに、こんなに時間がかかるとは思っていなかった。寒さで体が震える。少しでも早く家の中に入れるように、作業のペースを早めた。

夕方の五時前だけれど、太陽はほとんど隠れてしまっている。向かいの家の後ろに夕焼けのなごりが見えるけれど、じきに紺碧に染まってしまいうだろう。先ほどよりも息の白さが目立つようになってきた。

あの日も、ちょうど今ぐらいの時間だった。わたしは、長く伸びた二人の影を、食い入るように見つめていた。

真里ちゃんは、編入することにした、と帰りの電車の中で告げた。ここ最近、彼女は虚空を見つめていることが多かったので、何となく気づいていた。けれど、真里ちゃんがまだ入りたかった大学にこだわっていたとは思わなかった。理由を問うと、彼女はこう答えた。

「あたしはちゃんと勉強ができるところに行きたい。今の大学だつて嫌いじゃないけど、ちよつとちがう気がするんだ」

彼女の言うことも分からなくはない。こぢんまりした大学で、全体的にのんびりしている。ゼミやサークルを通じての、学生や教員、卒業生とのつながりは強い。ただ、授業は内容が薄いものが多い。それに彼女はもの足りなさを感じているのだ。

真里ちゃんが決めたことに口出しをするつもりはない。彼女はいつでも一人で考え、一人で決める。知り合った時からそうだった。けれど、今度だけはわたしに相談してほしかった。

そのことを真里ちゃんに言ったほうが良かったのかもしれない。知り合つて一年も経っていないけれど、言いたいことを飲みこんでおくような関係ではない。言えなかったのは、彼女の心を揺さぶりたいはなかつたからだ。

わたしは、真里ちゃんのしたいようにすればいいよ、とだけ言った。

洗濯物をすべて取りこむと、洗濯かごが満杯になった。中身を入れたまま、かごを居間に置いた。母さんがいつもそこで洗濯物をたたんでいるのだ。

1 自分の部屋に入ると、部屋の中も自分の身体も冷えきっていた。

校門の近くに來ると、うす汚れた校舎が目に見えこんでくる。元の壁が白いので、汚れがかなり目立つ。校舎が建てられてから一度も改装されていないらしい。キャンパス中に植えられた木が、校舎の屋根を覆っている。

わたしはまっすぐ中に入ってしまった。二時限目の授業はそこで行われる。

教室の近くまで来ると、大勢の学生が同時に出てきた。前の授業が終わったところだった。廊下に彼らの話し声と足音が響く。

学生たちの流れに逆らって中に入っていくとすると、真里ちゃんらしき人物とすれちがった。急いで後ろを振り返ると、つやのある長い黒髪と大きな茶色の肩かけかばんが見えた。かばんには桜の花をあしらった大きなキーホルダーがついている。まちがいない。

声をかけようとするけれど、真里ちゃんはどんどん教室から離れていってしまう。人が多すぎて、間をぬつていくこともできない。もうすぐ授業が始まってしまうので、あきらめて教室の中に入った。授業が終わってから、携帯電話に連絡することにした。

開始時刻になると、先生が教室に入ってきた。短い雑談をしたあと、先週の続きが始まった。

後ろのほうで話し声が聞こえる。授業の内容があまり頭に入っていない。最初は気にしないようにしていたけれど、そのうち大きな笑い声も聞こえてきた。声が大きくなってくると先生に注意され、会話を止めるけれど、しばらくするとまた聞こえてくる。わたしは、先生に注意されたグループを一瞬にらんだ。

いつだったか、同じような状況で真里ちゃんと授業を受けていたことがあった。

わたしたちは授業を聞きながらノートを取っていた。最初は二人とも気にしていなかったけれど、だんだん無視できなくなっていく。先生が注意を重ねるたびに、真里ちゃんの表情がこわばっていく。た。

「そんなにしゃべりたいなら、出て行けばいいのに」

先生が何回目かの注意をした時、真里ちゃんはノートを取りながらつぶやいた。その言葉に、わたしは黙ってうなずいた。

教室のひそひそ話はまだ聞こえている。ノートを取りながら、同じ言葉を口の中でつぶやいた。

授業が終わってすぐに教室の外へ出た。真里ちゃんの授業はもう終わっているはずだ。携帯電話に電話をかけてみた。けれど、何度かけても彼女は出ない。

避けられているのだろうか。いや、用事があつて出られないのかもしれない。あるいは、単に気づいていないだけという可能性もある。

真里ちゃんはいつも、かばんの中に携帯電話を入れている。彼女は、移動中だと気づかないことも多いので、メールも送ってみた。返信があるまで、校舎の外で待つてみる。

大学の敷地内には、都会にあるのが似つかわしくないほど、たくさん木が植えられている。春は濃淡さまざまな桃色の花で色づき、夏は木の下で気持ちのいい風が吹く。秋は落ち葉を踏みしめる音が心地よく、冬は裸で寒さを耐えていくとうとする木々にたくましさを感じる。

行くあてもなく、木で囲まれた道をぶらぶら歩く。ここを散歩していると、季節の移り変わりを肌で感じられて、肩に入っていた力が抜けていく。

歩きながら見上げた空には枝が這っている。今までは葉にほとんど隠されていたけれど、葉が落ちてしまつて、枝のすき間から見えるようになった。こげ茶色と淡い水色のある風景がわたしの心をと

らえる。

空、かあ。

いつもわたしの上にあつて、どこにいても、必ずそこにある。

けれど、空に触れることはできない。どんなに近づいても、指先すら届かない。近くにあつて、近くにないのだ。

どうして真里ちゃんは一人で決めてしまったのだろう。理由だけなら知っている。彼女はそういう性格なのだ。知り合った頃から分かっていた。

けれど、胸のつかえはとれない。

腕時計の文字盤に目をやると、夕食の時間が近づいていた。真里ちゃんのメールが返ってくるのを待っている時間は、もうない。彼女はもう帰ってしまったかもしれない。決まった用事もないのに、家に遅く帰るのも気が引ける。

風の冷たさに身を縮めながら、大学の最寄り駅へと向かった。

食卓には、めずらしく家族全員がそろっていた。父さんは仕事が早く終わり、妹は何日か前から体調をくずしていたので、早く帰らせてもらったようだ。まだ夜の七時を回ったばかりなのに、父さんのまわりには、ビールの空き缶が何本も転がっている。父さんは、酔うと陽気になる。バラエティー番組で芸能人が転ぶだけで笑うのだ。

父さんも母さんも妹も、何かしらの悩みを抱えているのだろう。父さんも母さんも、仕事やパートから帰ってくるいつも、ぐちをこぼしている。妹は、最近、食べ終わるとすぐに、自分の部屋に行ってしまう。中に隠れている大きな闇は、誰も外に出そうとしない。

夕飯を味わえなかった。ただ食べ物を口に運ぶだけの食事だった。

食べ終えた食器を台所に持っていくって、居間を出た。いつもは片づけも母さんと一緒にやるけれど、今日は少しでも早く一人になりたかった。母さんにひとこと謝って、居間を出た。

自分の部屋に上がっていこうとすると、階段の手前で母さんに止められた。

「唯、なにかあつたの？」

母さんはわたしの様子が気になったみたいだ。母さんの気づかいはありがたかったけれど、余計な心配はかけたくなかった。

「ううん、何でもないよ」

それなら良かった、と母さんは安堵したように言ったけれど、たぶん気づかれてしまったのだろう。

部屋に入ると、ぼんやりとした白い光の筋が見えた。部屋に一つしかない窓から、街灯と月明かりの混じった光が射しこんでいる。締め切りの迫っているレポートを仕上げるつもりだったけれど、部屋の明かりをつけずに光を眺めていたかった。

新入生向けのガイダンスがあつた日、わたしは休憩時間に一人で昼食をとっていた。黒板がさほど遠くない小さな教室でやっていたのだけれど、壁も机も天井も、すべてが真っ白で落ち着かなかった。すべてを拒んでいるような冷たさを感じた。

黒板の近くの席に座っている女の子が、わたしの方を何度も見返していた。気にはなつたが、わたしに用があるのではないだろう、と思い、気づかないふりをしていた。

「もしかして、わたしと同じ高校に通ってませんか？」

そのまま食べ続けていたわたしに、彼女は突然話しかけてきた。高校時代の記憶の引き出しを必死に探ってみたけれど、見覚えがない。友達は少なかつたけれど、高校にはきちんと通っていたので、

同じ学年ならだいたい分かる。顔を知らない人はそんなにいなかった。

もしかしたら、浪人生なのかもしれない。学年がちがえば部活動くらいしか関わりがない。同じ高校に通っていたのに見覚えがないのもうなずける。けれど、彼女は苦笑いして、現役生です、と否定した。

どうしても思い出せないのも、高校時代のクラスを聞いてみると、特別進学と呼ばれるクラスだった。国公立大学や私立大学の上位校を目指す生徒の集団だ。同じ中学に通っていた人くらいしか知り合いがいなかった。

「どうしてわたしのこと知ってるの？」

「いつも一人で帰るの見てたから。話しかけようと思ってたけど、チャンス逃して卒業しちゃった」

友達はいたけれど、学校の外で遊ぶことはほとんどなかった。同じ制服の人間を見るたびに、自分だけ置いていかれている気がした。彼女も似たような気持ちを抱いていたようだ。集団から外れて歩くわたしの姿と自分自身の姿を重ね合わせていた。彼女はそう語った。

高校時代にすれ違っていたわたしと真里ちゃんは、大学に入ってようやく巡り会った。

お互いに自己紹介をすると、高校時代の思い出話や気になっているサークルの話に花を咲かせた。無機質な教室の冷たさはもう感じなかった。コンビニで買ったおにぎりが、いつもよりおいしかった。

レポートの締め切りが明日の朝なのを、突然思い出した。まだ半分も書けていない。いま書きはじめなければ、間に合わない。

部屋と机の明かりをつけ、パソコンの電源を入れた。

朝の電車は学生とサラリーマンであふれかえっている。早い時間のせいか、眠っている人が多い。携帯電話を操作したり、本を読んだりしている人もいる。ときどき話をする人たちもいるけれど、彼らは申し訳なさそうに声をひそめている。

乗り換えの駅から出る電車は、どの車両も座席が埋まっていて、座れたことがない。ホームで電車を待つ人の多さに顔をしかめながら、列の後ろに並ぶ。

電車が来た。降りる人と乗る人が同じくらいいる。混み具合は変わらなかった。

ドアの前だけ人が固まっている。われ先にと降りたい人たちが集まっているのだ。いくら早く降りられても、四方八方に人が立っているのは息苦しい。わたしは少しでも余裕のある場所を探そうと、人ごみの間を抜けていった。

すでに埋まっている座席の前に立つと、端に座っている真里ちゃんの姿が目に入った。彼女のほうを見ると、イヤホンをつけたまま携帯電話を操作していた。わたしには気づいていないみたいだ。

わたしは彼女の近くには行かずに、その場に留まった。混んでいるからというのもあるけれど、彼女がわたしと話したくないと言っている気がして、足を動かさないのだ。真里ちゃんに視線を送ることさえもできない。

彼女の方を見ずに、窓に顔を向けた。

左に流れる景色を眺めていると、目の覚めるような色の空が目飛びこんできた。普通は水色とか、空色とか呼ばれるのだろうかけれど、どちらの呼び名も当てはまらない気がする。わたしの周りにある似たような色は、どれもいま見ている空の色とはちがう。澄んだ濃い水色、と呼べばいいのかもしれない。ずっと見ていると、わたしの目も心も、惹きつけられていく。

あの空に触れたら、どんな感触がするのだろうか。澄みきった空の色が、指や手のひらについてしまうのだろうか。爪の間に入ってしまうのだろうか。空を見るといつも考えてしまう。手を伸ばしても、

つかむことさえできないのに。

真里ちゃんは今の大学に満足していた。少なくとも、あの時までではそうだった。

知り合って間もない頃、帰りの電車の中で、真里ちゃんに今の大学を受けた理由を聞いた。彼女の高校時代の成績は、トップクラスだった。今の大学よりもっとレベルの高いところに合格できたはずだったけれど、彼女はわたしと同じ大学に通っている。

「第一志望と一緒に五つくらい受けたんだけど、みんな落ちちゃった。それで、受かったのが今の大学だけだったんだ」

「じゃあ、今の大学はあまり気に入っていないの？」

「そんなことはないよ。学校の雰囲気は好きだし。唯もいるし」

「ほめても何も出ないよ」

「かわいくないなあ。お世辞じゃなくて、ほんとのことなんだから」

第一志望だった大学に合格できなかったのは、かなりつらかったらしい。合格発表を見に行つて、何度見ても自分の番号がなかったのを見た時、真里ちゃんは走つてその場を離れた。すぐ近くで、他の受験生の両親が安堵の声をあげていたのも、かなりこたえた。けれど、過去のことだからもう悔やんではいないとも言っていた。なのに、今の大学を去ろうしているのはなぜなのだろう。やはり、のんびりしすぎていても足りないのだろうか。

身近な人ほど通じ合えないのはなぜだろう。一番心が見えるはずなのに、本当は何も見えていない。真里ちゃんは近くににいるのに、遠くにいる。わたしは彼女の心を分かっているつもりでいたけれど、本当は何ひとつ分かっていない。

けれど、近づくことはできるはずだ。もう一度真里ちゃんと話して、彼女の心に近づきたい。

ドアの開く音を聞くと、人ごみの間をむりやり抜けていった。

一時限目は休講だった。昨日までに分かっていたら、もつと寝ていられたのに。掲示を見た学生は口々に文句を言いながら、それぞれの行く先へ散っていく。レポートを出すつもりだったのに、急に空き時間ができてしまった。ほかにすることもないので、本を読もうと思つて、図書館に向かつて歩きはじめた。

聞き覚えのある声に呼びかけられて、わたしの足が止まった。後ろに、彼女がいた。

「真里ちゃん」

「久しぶりだね、唯」

わたしは、真里ちゃんが悩み疲れた顔をしているのだと思つていた。けれど、彼女は仲のよい友達とすれちがった時の、無意識にほころんだ顔でわたしの前に立っていた。わたしはそのことに驚いたけれど、同時に安心もした。

「あたしも授業が休講になっちゃった」

わたしも真里ちゃんと同じように顔をほころばせた。

「散歩しようか」

真里ちゃんがうなずくと、わたしたちは一緒に大学の外に出た。

裏門を出てすぐの、まっすぐ伸びた道は、大学のにぎやかさとは裏腹に、静まりかえっている。人が歩いていることはほとんどなく、車もたまにしか通らない。今は、二人のほかに歩いている人はいない。

ろに行きたい時は、よく使っている。

公園には誰もいなかった。側を通る人もまばらだ。遊具は眠ったままだ。

入り口に一番近いベンチに、わたしたちは腰かけた。しばらくの間、話を切り出すタイミングを探り合っていたけれど、真里ちゃんが先に口火を切った。

「ごめんね」

彼女が何を謝りたいのかは分かっていた。わたしが何も言わずにいると、真里ちゃんは続けて話した。

「唯が相談してほしいって思ってたの、知ってたよ。急に別の大学に行く、なんて言い出したらショック受けるもんね。でも、言えなかった」

「真里ちゃんが相談するの苦手なのは知ってるよ。でも、ひとこと言ってほしかった」

「ごめん。唯に引き止められたら、あたしの心が揺らいじやうかもしれないって思ったから。それが怖かった」

その言葉を聞いて、一気に心の中が晴れた。彼女は一度決めたことを曲げなくなっただけなのだ。

真里ちゃんは編入を考えたまっかけも話し始めた。

「この前ね、あたしが行きたかった大学に行ってる友達に会ったの。それで、お互いの大学の話をしたらね、あの子、すごく生き生きしてるの。話聞いてたら何だかショック受けちゃって」

でも、今の大学だって。反論しようとしたわたしの言葉にかぶせて、真里ちゃんは話し続けた。

「そうだね、今の大学だってだめな人たちばかりじゃないよね。しっかり目標持って大学生活を送ってる人たちだっている。だけど、あの子の目の輝きは今の大学にいても生まれない。そう思ったから、あたしは編入を決めたんだ」

一度だけ、真里ちゃんが行きたかった大学の学園祭に行ったことがある。歴史を感じさせる洋風の校舎。校門からそこまでの道には、模擬店がたくさん出されていた。どの店にいる学生も目が輝いていた。売り子や呼びこみの人たちも元気だった。彼らが大学全体の雰囲気に影響を与えているのだと感じた。

今の大学の学園祭も盛り上がりはするけれど、真里ちゃんが行きたかった大学のような輝きは見えない。彼女のように積極的な人間は、もの足りなさを感じるのだろう。今の大学よりも、行きたかった大学のほうが自分を活かせると彼女は考えたのだ。

「あたしもね、真里ちゃんの行きたかった大学に行こうと思ったことがあるよ」

このことは、家族にすら言ったことがなかった。彼女は目を見開いて、わたしの次の言葉を待っている。

「あたしもあそこの雰囲気好きだったから。あたしの学力じゃ、全然届かなかったけど。真里ちゃんが言いたいこと、よく分かるよ」

真里ちゃんはおわたしの横顔を見つめていた。何か言いたいけれど、言葉が見つからないようだ。彼女が口を開くのを待たずに、わたしは言った。

「がんばって、真里ちゃん」

今日は授業がない。入試のために大学の校舎がすべて使われているのだ。テスト期間も始まっていないので、勉強をする必要もない。パートに行った母さんに頼まれた家事をする時以外は、ほとんど本を読んでいた。

湿った洗濯物をつかむたびに手のひらや指にしみる。刺すような冷たさを感じながら、母さんは洗濯物を干している。冬の間、毎日くり返しているのかと思うと、いつも文句を言いながら家事を手伝っている自分が情けなくなってくる。

ベランダの下から誰かが呼びかけてきた。手すりから少し乗り出して見てみると、妹が玄関の前にいる。

「ただいま」

「おかえり、愛」

ベランダからの呼びかけにこたえ、そのまま作業を続けた。

洗濯物は大量にたまっていて、冷たさは手のひらや指を刺してくる。また上着を着るのを忘れ、冬の風に震える。けれど、湿り気のない冬晴れが冷たさと寒さを少しやわらげてくれる。

愛がいつの間にか二階が上がってきていた。彼女の部屋の窓はベランダに面していて、そこから出られるようになっていた。愛は学生服のままベッドに座っている。わたしは洗濯物を干す手を止めずに話しかけた。

「まだ体調悪いの？」

「うん。今日は体がだるかったから、休ませてもらったんだ」

愛は疲れた声で答えた。ここ何日か、彼女は早く帰ってきている。体の疲れだけではないように思うけれど、詳しいことは聞けない。聞こうとすると、話をはぐらかされてしまう。

いま聞こうと思ったけれど、うつぶせになって、携帯電話でメールを打っていた。何かをしながらではきちんと話ができないと思い、ゆっくり休みなよ、と声をかけるだけにした。

「お姉ちゃん」

メールを打つ手を止めて、愛はわたしの背中に話しかけてきた。顔を向けると、何か言いたそうにしている。愛はしばらくわたしの顔から目を外さないでいたけれど、目を伏せて、なんでもない、と力なく笑った。わたしを心配させないための嘘だと分かっていたけれど、それ以上は何も聞かないことにした。

愛がわたしの家事を手伝おうとベッドから降りたけれど、ベランダは人ひとりがやっと通れる広さだ。二人いると作業しづらいので断った。愛はそうだよね、と笑って洋服ダンスを開けた。窓を開けたまま洗濯物を干しているので、向かいの家のベランダから見えるかもしれない。干しながら、わたしの部屋で着替えるように言った。

陽射しの暖かさとは反対に、外の空気は冷えこんでいる。淡い橙色の光と白い息が同じ空間にある。

もう太陽が傾き始めている。いま見ている空は、すぐに茜色に染まり、紺碧に染まってくだろう。まだ色が変わらない空に触れてみたくなって、腕を伸ばした。

冬の風が指の間を抜けていく。指先さえも、空には届かない。けれど、感触だけは手のひらに伝わってきた気がした。